

## 令和4年度プロジェクト発表会・意見発表会講評

全体審査委員長 安藤 義道

### 総括

コロナ禍での3年ぶりの開催となった。開催当日(2月7日)の新聞報道によれば全国のコロナ感染者数は1万5254人で、依然として予断を許さない中での開催といえる。背景には開会挨拶にもあったが、「学生同士の交流をさせたい」「発表したことを励みに地域で活躍する卒業生もいる」(金岡裕司全国農業大学校協議会会長)という主催者の並々ならぬ思いと長きにわたる伝統があったのだ、ということを感じさせられる歴史的発表会であった。

場所も使い慣れた国立オリンピック記念青少年総合センターが工事の都合で使用できず東京都北区滝野川会館に、参加人数もこれまでの3分の1の百名程度にしぼっての発表会となったが、発表会はこれまでと同様、熱気にあふれた素晴らしい出来栄の大会であった。

唯一これまでと違っていたのは全員がマスク着用であったということだろう。この3年ですっかり定着したスタイルだとはいえ、発表者には思い切った発声もままならないというもどかしさもあったのではないだろうか。中には元氣よく大声で意見発表したり、プロジェクト発表でも声を大きくするなどして思いを強調する場面もあったがさすが農大生である。

発表内容もそれぞれが全国代表だけに調査・研究の検討がよく行き届き、発表方法ではパワーポイントをうまく使いこなして説明ができていた。発表態度も落ち着いて堂々とし、審査員の質問にもてきぱきと応じることができていた。ただ、意見発表において時間の超過が目立ち反省の余地を残した。

プロジェクト発表の中にはよく整理されていて学術的にも高い評価のものもあったが、意見発表も含め全体としての見解はレベルが高く審査員一同採点に

苦慮したというのが共通の感想である。

## 1. プロジェクト発表 養成課程の部

15 課題のうち、発表者は男性と女性ほぼ半々だったが、2 課題を発表した大学校が 3 校あったのが目についた。また、継続研究を続ける大学校も 4 校ほどみられたが、そのことが地区大会でも高い評価を受けていたことも注目に値する。

課題を作目別にみると、牛が 3 課題（肉牛が 2、乳牛が 1）、稲が 4 課題（内容的には V 耕栽培、ドローン活用、飼料米、防疫対策と異なる）、果菜が 3 課題（トマトが 2、イチゴが 1）、果樹が 2 課題（柿と桃）、花（食香バラ）・野菜（ヘチマ）・肥料（廃棄物利用）が各 1 課題であった。関心領域は異なるが一時期に比べ稲作への関心が増えた印象があるが、内容的にはそれぞれが今日的課題をうまく取り上げている。花も観賞用ではなく食用のエディブルフラワーであったり、肥料も廃棄物利用（トマトの 1 課題は肥料に豚糞ともみ殻、廃菌床を利用）というように農業に対する見方の多様性も感じる。

今回特に目についたのはスマート農業（農業へのドローンやロボット・AI 等の活用）、持続型・環境保全型・SDGS（持続可能な開発目標）といった時代の潮流に沿った研究への関心である。農大生の新しい農業に対する期待と受け止めた。

こうした新たな農業分野への挑戦も大切であるが、研究である以上、課題にマッチする研究過程上の創意工夫と、地道な日頃の観察によるデータ収集、さらにはその科学的な分析が重要になる。「創意」というのは模倣ではなく「独創的」ということである。「科学的」というのは「実証的」ということである。

もうひとつ重要なことは研究成果の社会的還元ということである。審査

項目にもある「自家の経営または地域の農業にどう展開しようとするのか」ということである。この点をしっかり踏まえた発表が多かったが、なおざりにされているものもあった。

最優秀賞、優秀賞の受賞発表はこれら研究上の創意工夫やデータの分析、成果の展開等が総合的によくまとめられていた点が評価された。

## 2. プロジェクト発表 研究課程の部

研究課程は養成課程卒（または短大卒以上）が入学条件になっている。したがってプロジェクト学習も、養成課程で習得した農業技術や調査研究の成果をより一層深化・発展させるための応用として実施することが期待されている。今回の発表をみるとその期待に沿うものとなってきている。

審査員からも、最優秀賞の発表はプロジェクトの成果をどのように落とし込むのかを意識し、また質疑応答においてもすばらしいものがあった、との評価があったが、課題名「受精卵移植師としての卵巣触診技術の向上」は、養成課程で習得した農業技術や調査研究の成果をより一層深化・発展させる目的で実施していることをよく表している。

研究課程の発表は残念ながら1課題に棄権があり、3課題だけの発表会となってしまったが、どの発表も地域事情に合ったテーマ設定であり、成果の取りまとめも含めて、研究課程のプロジェクト研究にふさわしい内容の充実した発表であった。

## 3. 意見発表の部

意見発表に求められているのは「大学校等の学習や家業の農林業経営、地域の農山村環境や新規就農等について、日頃考えていることや思い」についてである。発表結果は、発表者はみんなよく自分の考えを持って述べて

いた、との評価がある一方で、みんな同じようなことを言っていてこじんまりとした内容のものになってしまっているとの意見もあった。

また、農家出身者と非農家出身者で違う、社会人経験者の方がまとめ方がうまいとの評価があったが、これは育った環境や日頃話す相手との違いからくるものだろう。ちなみに発表者の農家出身者と非農家出身者割合は半々、男女割合は7対3で男性が多かった。社会人経験者は3人だったが、最優秀賞受賞者もそのひとりであった。

今回意見発表において最大の課題は発表時間の超過にあった。10人中7人で超過があったというのは改善の余地がある。理由として審査員からは、発表者に少し緊張感が欠けていたのではないか、学校側の指導が及ばなくなっているのではないかの見解が示されたが、地区大会を経ての結果であることを重く受け止めなければならない。またある審査員からは、意見発表ではなく提言発表になっているとの指摘もあったが、発表内容も含め精査が必要だろう。

とはいえ、ほとんどの発表者が原稿を見ることなく聴衆に向かって堂々と発表できていたことは今後の学習にも経験として大いに生きるであろう。発表を次のプロジェクト研究に生かし、さらに発展させていってくれることを期待する。

## おわりに

コロナウィルスとウクライナ戦争による家畜飼料や化学肥料等農業用資材の高騰や、とどまることを知らない鳥インフルエンザの拡大という不安定な社会情勢の中での開催となったが、発表をみるとこれらの問題を正面から科学的に捉えようとする全国農大生の意気込みが感じられた。

3年ぶりの対面開催となる本発表会だったが、やはりリモート発表とは違うエネルギーを感じるが多かった。コロナウィルス感染という不安を

感じながらの開催だったが、関係する大学校職員の努力と全国の農大生仲間の協力により立派に問題なく発表会を終えることができた。改めて運営に当たられたみなさんにお礼を申し上げたい。

最後になるが発表者はもちろんのこと、陰で支えた農大生諸君も、この貴重な体験を契機に、日本のそして地域の農林業振興、地域社会発展のためになお一層の研鑽に努めていてもらいたい。